

2022年11月 診療カレンダー

住所: 東京都中央区日本橋大伝馬町13-8

2022年12月 診療カレンダー

メディカルプライム日本橋小伝馬町3階  
TEL: 03-3639-3110 FAX: 03-3639-3112

・インフルエンザ  
予防接種実施中  
・健康診断  
実施中です



ホームページ  
院長ブログ公開中

18時最終受付

日	月	火	水	木	金	土
27	28	29	30	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

## 「今月の言葉」

「お金を稼ぐ」とか「権威や地位を守る」とかよりも、  
「人を喜ばせる」ということが世界で一番大事だと思うのです  
～村上 隆(アーティスト)～

## 東大分院の思い出

11月になりました。皆さまいかがお過ごしでしょうか。  
先日「ちばてつや」さんの「あしあと」(追想短編集です)を買いま  
した。そちらに収録されている「トモガキ」のなかで、ちばてつやさん  
が講談社の別館で負傷し東大病院の分院へ搬送され、手術と入  
院をしたときのことが描かれていました(ちなみに「トモガキ」とは  
「友垣」と書いて「友達」のことを指すそうです)。

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、東大病院の分院はか  
つて文京区目白台にあった病院で、護国寺にある講談社の裏側の  
坂の上にあります。私は北大を卒業後、東大病院の内科研修医  
となり、その最初の配属先が第四内科でした。第四内科は分院の  
内科のことで、こちらで半年のあいだ内科の研修医として過しま  
した。医師になりたての自分が初めて勤務した病院ということもあ  
りその時の記憶は今でも深く心に残っています。

分院は100年以上の長い歴史を刻んでおり、かつて日本で最初に  
胃カメラの開発を行った外科医の宇治達郎先生もこの病院で胃カ  
メラの開発と完成をさせたことは有名ですし、宮沢賢治の妹のトシ  
もこの病院へ入院したことがあるそうです。近代的な建物に見慣れ  
ていた私にとって、外壁にスクラッチタイル(煉瓦)が貼られ、廊下  
には木材が使われた年季の入った内装、戦前からあるような3階建  
ての大変古い建造物を初めて目にしたときはかなり衝撃を受けま  
したが、毎日通っているとその趣のある分院の佇まいがとても好き  
になりました。

都心の歴史がある病院ということで、親子代々通ってくださる  
患者さんも多く、患者さんが近所の群林堂の豆大福を差し入れてく  
ださったり、大学病院としてはのんびりとした温かい雰囲気でした。

そうは言っても大学病院ですから、当時は雑用のいっさいがっさい  
はすべて研修医の仕事で、採血や点滴はもちろん何故か？ナース  
コールまで研修医が取ったりするようなハードな環境でした。夜遅く  
ようやく椅子に座ってカルテを書いたり温度板に記入したりと毎日  
深夜まで果てしなく仕事が続きます。そういうなかで自然と研修医  
同士、仲間意識が芽生えてきて夜は一緒にお弁当を頼んだり、時  
には近所のロイヤルホストに外出に行ったりお互い励ましあいなが  
ら研修をしていました。

同僚たちはとても優秀で真面目な人ばかりでしたが、変わっている  
人もいました。例えばKさんは、東大の工学部を出てからブータ  
ロー(自称パチプロと言っていました)をして、その後最難関国立  
大の医学部を出て研修医をしており、当時すでに30代後半でした。  
医師になると何故か？お互いに〇〇先生と呼び合うことが多いの  
ですが、Kさんはそれを嫌がり人には自分のことをKさんと呼ばせ、  
私にも「齋藤先生」ではなく「齋藤君」と呼んでいました。

一般診療	月	火	水	木	金	土	日
10:00-13:00	●	●	●	●	●	●	×
15:30-19:00	×	●	●	●	●	×	×

## ●9:00-12:30

その影響で我々の間でも「齋藤先生」とは呼ばずに「齋藤君」「齋  
藤」または「幹ちゃん」などかなりフランクに呼び合うようになりました。  
ときどき患者さんの前でもお互いニックネームで呼び合い、上  
司の先生から「そういう呼び方は患者さんの前では良くないよ」と注  
意されたこともありました。

Kさんは工学部の出身なのにあまりパソコンは得意ではなく、サマ  
リーを打ったり論文を調べたりするのがとても億劫なようでした。仕  
事が遅い私を同類！仲間？と感じるのか、2人きりで夜中に仕事を  
していると「こんなパソコンで書類を作成しても意味がない、馬鹿馬  
鹿しい仕事が多すぎる」としょっちゅうぼやいておりました。後にK  
さんは作家になり自分の研修医時代をベースに小説を書いているよ  
うです。幸い我々のことは言及していないようですが、Kさんにとっ  
ても研修医時代は大変強烈な思い出になっているようです。

分院の内科の上の先生方はとてもいい先生が多かったのですが、  
それでもなかにはあまりに仕事が辛く、途中で失踪してしまった同  
僚もいました。その友人を呼びだして研修医みんなが集まって彼を  
はげまして、食事会をしたりしたこともありましたが、私自身も仕事  
が辛くて分院の屋上へあがってひとりで夜空を見あげていたことも  
何度もありました。

さて、わたしが研修医になってすぐに80代後半の重症の肺炎の患  
者さんが入院してきて担当になりました。その患者さんは以前クリ  
ニック通信でご紹介した上司のN先生と一緒に一生懸命治療をし  
ましたが残念ながら1週間ほどで亡くなってしまいました。当時大学  
病院では亡くなった患者さんに解剖のお願いをすることが一般的で、  
N先生と2人で患者様のご家族へお話ししたところ「この病院には  
ずっとお世話になっていたから」と承諾してくださいました。解剖が  
終わり患者さんの息子さんへその結果をお伝えしたところ、「先生、  
一生懸命治療してくれてありがとう。先生研修医だろ。是非いい医  
者になってくれよ！」と温かい言葉で声をかけていただきました。自  
分は医師になったばかりで実際には何もできずに患者さんのそば  
にいただけでしたので、その時になんて答えたらよいか分からずた  
だただ頭を下げたのを覚えています。

東大病院分院は私が研修医を過ごした約5年後に、東大病院本院  
と統合されて閉院となりました。しばらく建物は残っていたようで  
すが、今は東大目白台インターナショナルヴィレッジという留学生向  
けの寄宿舎に建て替えられているようです。

研修医時代を過ごした分院は医療技術の習得はいまでもありま  
せんが、心のふれあいが交差する人情あふれる日々でした。ちば  
てつやさんの「トモガキ」を読んで、あの古い東大病院の分院から  
自分の医師人生が始まったのだと、当時の思い出が次々に蘇って  
きて懐かしさと寂しさで胸がいっぱいになりました。